

世界連邦東京・京都大会を顧みて

世界十九九国から百六十人の代表が集り、二十四日から東京・京都で開催された第十一回世界連邦世界大会（東京大会）と世界協賛会（京都大会）が三十日、全部の日程を終えた。終会の前、東京大会のような二千人以上の代表員、



世界連邦終会風景

大会の成果を生んだものと感じる。軍備を全面的に撤回すべく、それを可能にするために経済団の措置をまずしつづけるべきである。行動が起されてくるかという質問になるが、日本における世界連邦（国際基督教大学教授、世界連邦大会日本代表委員）

アトリー元英首相夫妻をはじめ、外国代表の中には多くの知名人が含まれていた。しかし池田首相はどうかという世界連邦開会式には顔を見せなかった。

日本印像についてアトリー氏は、東京から京都へ向う途中、車窓の景色をながめながら「日本は高度の工業国だ」という理解だけ持って来日したが、農業の方も、実によくすすみまき料もされている」と感心していた。各国代表とも京都の千年前の寺院や美術品を見て「歴史の古い国だ」とあらためて印象を深めた様子。マラリニー事務局長（英）は「シチー・オブ・ピース（平安京）の名にふさわしい町だ」と喜んでいた。

宗教問題では「限界」

通訳お粗末でお手上げ

動かし、外務省がこれまでの先例を踏んでみたら、デนมックのよろしく国会議員の半分以上が国会議員世界連邦協会の参加しているよるな国でさえ、首相だけはノータッチ、ということがわかった。

動かし、外務省がこれまでの先例を踏んでみたら、デนมックのよろしく国会議員の半分以上が国会議員世界連邦協会の参加しているよるな国でさえ、首相だけはノータッチ、ということがわかった。

側の手落ちだった。そなたは理由について西村閣内閣事務局長は「日本協賛会を構成する五団体の間が、必ずしも（一）に一致しなかつたが原因」と率直に認めていた。

c084-016-049

c084-016-050